

# ソーシャルワーカーのコロナ禍での実践から未来を見据えて

上原正希 [星槎道都大学教授／特定非営利活動法人日本ソーシャルワーカー協会理事]

## 1 新型コロナウイルス感染症がもたらした社会変動

2019年12月初旬、中国の武漢市で新型コロナウイルス感染症（COVID-19 以下、コロナ）の第1例目の感染者が報告されてから、わずか数カ月ほどの間にパンデミックと言われる世界的な流行となり、2020年1月15日に我国最初の感染者が確認されて以降、全国的に感染が拡大、緊急事態宣言及びまん延防止等重点措置の発出、デルタ株、オミクロン株への変異など先の見えない不安の中で感染者が急増、その後、ワクチン接種率の向上で鎮静化しつつあったものの、社会経済活動が活発化する中、現在もなお不透明な状況が続いている。

## 2 コロナによって変化した社会福祉対象者の生活

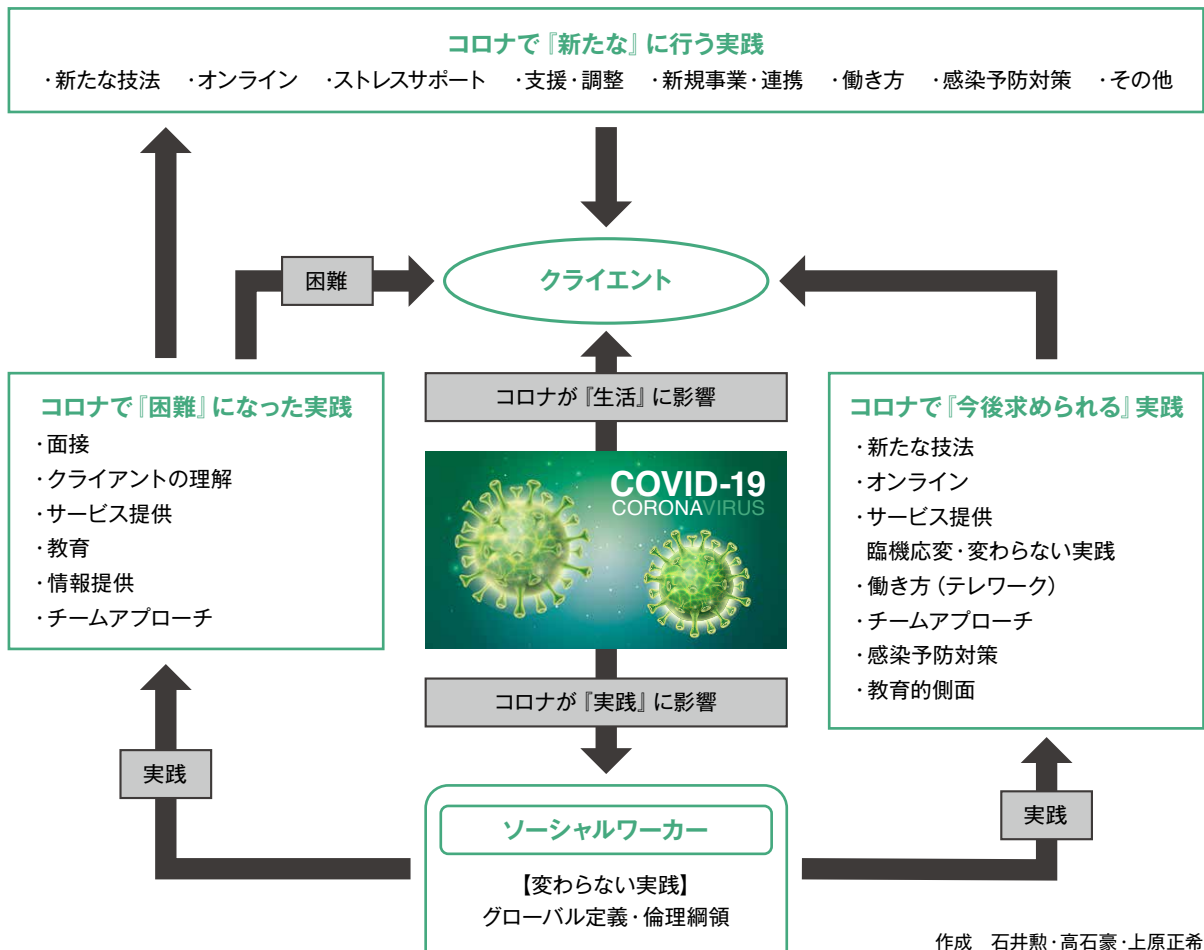
昨今、公助・共助の機能低下から、地域共生社会など、自助・互助の取り組みが社会福祉政策の中心として組み込まれ、地域の相談機能強化、集いの場の形成などの取り組みが行われてきた。しかしコロナによって、感染防止のための外出自粛や人流抑制により、社会福祉対象者は自宅で過ごす時間が長くなり、地域での交流も減少、心身機能低下や精神面の不調・悪化、フレイルや要介護状態を引き起こす恐れが懸念されることとなった。

## 3 コロナによって変化したソーシャルワーカーの実践

外出自粛や目に見えないコロナへの不安などにより、自宅生活を余儀なくされた社会福祉対象者への支援に対し、対面での面接やアウトリーチでの支援もコロナの恐怖から、その対象者となる高齢者や障害者が訪問を拒んだり、また所属先の指示により、ソーシャルワーカー自身が自宅でリモートワークやオンライン会議などをせざるを得ない状況に置かれ、また、地域交流や埋もれた地域問題の発見、相談機能を持つサロンや認知症カフェなどは開催できず、結果、社会福祉施設や地域交流拠点などでのソーシャルワーカーの支援の停滞・停止は、社会福祉対象者の支援や発見に大きな困難を生じさせた。

## 4 コロナによって新たに生み出されたソーシャルワーカーの実践

ソーシャルワーカーの中には、自らが感染者になるリスクがある中、社会福祉対象者への支援、職員の健康・衛生管理、感染予防教育などを実施し、業務や精神面での負担は増強されながらも実践した者も数多くいた。また、コロナがソーシャルワーカーの実践にマイナス要素のみではなく、新たにオンラインでの実践や会議、研修が広域で開催され、新しいネットワーク構築にもつながったり、新たな事業を生み出した事業所も存在し、プラスの要素も生み出した。下図は、「コロナで『困難』になった実践」、「コロナで『新たに』行う実践」、「変わらない実践」、「コロナで『今後求められる』実践」を日本ソーシャルワーカー協会が実施した調査から整理したものである。



「新型コロナウイルス (COVID-19) 感染拡大におけるソーシャルワーク実践の図式化」

## 5 シンポジウムでの発題

私はシンポジウムで、特定非営利活動法人日本ソーシャルワーカー協会が実施した(2)及び(3)の2つの調査から、「コロナによって変化したソーシャルワーカーの実践」と、「コロナによって新たに生み出されたソーシャルワーカーの実践」を概観、報告し、ウィズコロナ、さらにはその先を見据えたポストコロナ。また世界的には10年周期で新たなコロナが社会を蔓延しており、日本にも今後、新たなコロナが発生する可能性もあることから、将来を見据えたソーシャルワーカーの実践について、一緒に考えていければと思っております。

### 【参考文献】

- (1)上原正希(2021).「コロナとソーシャルワーク」.日本ソーシャルワーカー協会会報(134)
- (2)上原正希・高石豪・石井勲(2021).「新型コロナウイルス(COVID-19)感染拡大におけるソーシャルワーク実践の現状把握と今後のあり方に関する調査」結果からの一考察.ソーシャルワーカー(20). pp 71-84
- (3)特定非営利活動法人日本ソーシャルワーカー協会(2022).「高齢者支援における新型コロナウイルス禍でのソーシャルワーク実践の実態調査」報告書.公益財団法人太陽生命厚生財団 2020 年度研究・調整助成